

以外に人為的な移入種の定着も近年無視できない状況になりつつあり、新たに発見される種にそのような種が少ない。ここ10年程の間に定着したと考えられる国内外来種だけでも、ワタミヒゲナガゾウムシ、イネミズゾウムシ、シバオサゾウムシ、サカグチクチプトゾウムシ、チビコフキゾウムシ、ヤサイゾウムシ、ダイコンサルゾウムシ、マツノシラホシゾウムシ、ニセマツノシラホシゾウムシ、アルファルファタコゾウムシ、ヒラヤマメナガゾウムシと11種におよび、国内外来種の数も伊豆諸島中もっとも多い。温暖な南西諸島方面からの観葉植物や観光開発、公園整備にともなう根つき植樹の大量持ち込みが行われており、それに紛れて侵入したものが大半と考えられる。これら移入種の中にはサカグチクチプトゾウムシやヒラヤマメナガゾウムシなど、異常発生し害虫化している種も存在する(川畑, 2011)。さらに、近年、これまで記録のなかった海浜性のトビイロヒョウタンゾウムシが、底土港脇の海岸から見つかった(沢田, 2010)。この場所は海水浴場として整備された場所で、伊豆諸島外からも砂を持ち込んでいるとのことで(港湾作業関係者私信)、本種はその砂に混じって持ち込まれた可能性が高い(Fig. 3)。

八丈島のゾウムシ相はまだ完全に解明されたわけではなく、今後も上述のような過程で、新たな種が人為的に侵入する状況が続くと、新たに見つかった種が在来種なのか移入種なのかの区別ができない状況になりかねず、島の生態系への影響のみならず、島の生物地理学的研究を行う上での支障をきたす恐れがあり、状況を注視して行く必要がある。

引用文献

Chûjô, M. & K. Morimoto, 1960. Curculionid-beetles from the Hachijô Island (1). *Entomological Review of Japan*, 11: 3-6.

- 神谷一男・山本 玄, 1935. 八丈島産甲蟲類目録(豆南諸島昆虫分布資料 III). *昆虫*, 9: 228-231.
- 川畑喜照, 2011. 伊豆諸島八丈島の甲虫 VIII. *神奈川虫報*, (173): 53-62.
- 小島弘昭, 2011. 伊豆諸島神津島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. *さやばねニューシリーズ*, (4): 20-21.
- Kojima, H., 2011. Record of some weevils new to the fauna of Hachijô-jima and Aogashima Islands, the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 1: 341-342.
- Kojima, H., 2012a. Additional record of weevils new to the fauna of Izu-Ôshima Island, the Izu Islands, Japan (Coleoptera, Curculionioidea). *Elytra*, (n. ser.), 2: 144.
- Kojima, H., 2012b. Additional record of weevils new to the fauna of Hachijô-jima Island, the Izu Islands, Japan (Coleoptera, Curculionioidea). *Elytra*, (n. ser.), 2: 150.
- Kojima, H. & C. Zhang, 2013. Weevils new to the fauna of Niijima and Shikine-jima Islands, the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 3: 183-184.
- 小島弘昭・藤澤侑典, 2011. 伊豆大島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. *さやばねニューシリーズ*, (4): 9-11.
- 小島弘昭・森本 桂, 2004. 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. *九州大学総合研究博物館報告*, (2): 33-147.
- Kôno, H., 1927. Beitrag zur Kenntnis der Attelebiden-Fauna Japan. *Insecta Matsumurana*, 2: 34-45.
- 正木十二郎, 1937. 豆南諸島に於ける昆虫相に就いて(第1報). *昆虫*, 6: 80-93.
- 的場 績, 1999. 和歌山県産ゾウムシ科目録. *和歌山県立自然博物館館報*, (17): 29-51.
- Morimoto, K., 1982. The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobiinae. *Esakia*, (19): 51-121.
- Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan. *Mushi*, (50): 19-85.
- Morimoto, K. & C. E. Lee, 1992. Curculionidae from Cheju Island, Korea, with descriptions of three new species (Insecta, Coleoptera). *Esakia*, (32): 1-18.
- 野津 裕, 2010. 東京都八丈島のシギゾウムシ. *神奈川虫報*, (172): 13-14.
- 沢田佳久, 2010. 海浜性トビイロヒョウタンゾウムシの二島嶼からの発見. *日本生物地理学会会報*, 65: 163-167.
- 妹尾俊男, 1987. 東京都に生息するヒゲナガゾウムシ科甲虫について (I). *中央大学付属高等学校 教育・研究*, (1): 73-82.

(2014年4月7日受領, 2014年5月25日受理)

【短報】ジンサンシバンムシ成虫の野外における越冬例

ジンサンシバンムシ *Stegobium paniceum* (Linnaeus, 1761) は、乾燥食品などに付く食品害虫とされ、屋内で発見される例が多い一方で、ハトの巣などを源として野外でも発生することが知られている。その生態については、「越冬態は幼虫で、成虫は西日本では、保温性の良い一般家屋で4月中～下旬に出現する」(酒井, 1995)、あるいは「年1～3回の発生で、幼虫で越冬する」(「イカリ消毒の害虫診断・駆除商品情報サイト」より引用)と

されている。

筆者は、本種の成虫が東京と横浜の市街地において、成虫で野外越冬しているところを複数回確認しているため報告する。

1ex., 東京都目黒区碑文谷, 13. I. 2013; 1ex., 神奈川県横浜市都筑区新栄町, 10. II. 2013; 1ex., 東京都目黒区大岡山, 12. I. 2014 (採集個体はすべて筆者保管)。

これら3個体の成虫の越冬場所は、それぞれいづれもケヤキの樹皮下で、図1のように他の昆虫と共に越冬していた。採集して手の上に載せたり



図1. ジンサンシンバンムシの越冬状況.



図1. クロキマダラケシキスイ.

日光を当てたりするとほどなく動き出したので、仮に採集しないでそのままの状態で居続けていれば、春になって気温が上がるのを待って活動を始めるものと思われた。

末筆ながら、本報告を助めていただいた岩田隆太郎氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

酒井雅博, 1995. シバンムシ p. 268-270. 日本家屋害虫学会編, 家屋害虫事典, 井上書院, 東京.
イカリ消毒の害虫診断・駆除商品情報サイト: <http://www.ikari.jp/gaicyu/12020d.html#top>

(上田衛門 152-0032 東京都目黒区平町 1-16-11)



図2. ムナクボヒラタケシキスイ.

【短報】東京都区内で冬季の夜間に樹液に来ていたケシキスイ類の観察例

東京都区内の、とあるポイントでは、数本のアカガシおよびシラカシの幹から、ひと冬を通して樹液が流れ続けている（または滲み出ている）。それらの樹液の流れ口には、木屑が溜まっていたり小さな穴が開いていたりすることから、樹液が出ているのはカミキリムシ類の幼虫が冬季にかかわらず幹の中で活動している作用によるものと見られる。筆者は、その樹液を2013年末から2014年初にかけてひと冬の間、不定期ながらおよそ7~10日置きの間隔で夜間（20時から22時の間のいずれかの時刻）に観察を続けたところ、真冬の時期を含め、ケシキスイ科の2種が樹液で活動していることが認められたので、報告する。

活動していた2種のうちの一つは、クロキマダラケシキスイ *Soronia lewisii* Reitter, 1884 である。本種の採集・目撃記録は、次のとおり。

1ex., 東京都目黒区八雲, 22. XI. 2013; 11exs., 同所, 30. XI. 2013; 3exs., 同所, 4. XII. 2013; 3exs., 同所,

11. XII. 2013; 2exs., 同所, 22. XII. 2013; 3exs., 同所, 28. XII. 2013; 2exs., 同所, 1. I. 2014; 1ex., 同所, 4. I. 2014; 1ex., 同所, 12. I. 2014; 1ex., 同所, 25. I. 2014; 1ex., 同所, 18. II. 2014; 4exs., 同所, 26. II. 2014; 1ex., 同所, 28. II. 2014.

筆者がこの観察を始めたのは、おおかたの甲虫が活動しなくなる11月下旬のことで、アカガシの樹液で1個体を見つけたのが、筆者にとって本種との初めての出会いだった。その後、シラカシの樹液でまとまった数の個体が見つかり、そのシラカシの樹液が涸れた後も、アカガシで何頭か個体を見出すことができた。1月から2月にかけての厳冬期に入ると、夜間の気温は東京都区部でも5℃を優に下回り、時には零度近くとなることもあるが、そのような寒冷な状況下でも、数はきわめて限られていながら、本種の個体を幹の表面に見出すことがあった。そのような個体は、さすがにほとんど身動きすることなくじっとしていたが、ライトを照らし続けたり落ち葉の柄で突いたりすると動き出したので、冬眠中ではなく明らかに活動中であることが伺われた。また、2月下旬の、辺りに雪